
真夜中のパラ・ダイス

オリオン同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中のパラ・ダイス

【Nコード】

N7500X

【作者名】

オリオン同盟

【あらすじ】

東京を襲う時期外れの熱帯夜現象。それが出現すると現れる、剣を持った謎の少年・紺野悠夜^{こんのゆうや}。彼は、この熱帯夜を“熱帯巨兵”として見る事ができ、それを倒す力を持っている。彼の同級生・桃瀬^{ももせ}小乃葉^{せいのは}の作曲した曲が、全ての始まりだった。“王の剣”を持った六人の少年少女を中心に、異世界の王たちの記憶を辿る物語。

第0話：巨人とスカイツリー

> i 3 3 2 5 6 — 1 3 6 5 <

(イラスト/K氏)

「東京で桜の満開日を迎えた今日ですが、ここ数年続く真夜中の熱帯夜現象は一体何なのでしょう。地球温暖化の予期せぬ影響か、都市におけるヒートアイランド現象の影響か。それにしても不思議なのは熱帯夜が移動すると言う事でしょうか。東京全体での現象ならまだしも、地域的に突然的に熱帯夜となり、かと思ったら突然涼しくなったり。さっきまで渋谷が暑かったと思ったら、流れる様に中野に移動したりと。天気予報で当てる事の出来ない突然発生の自然現象、生きる熱帯夜という専門家も居ます。この現象によって体調を崩しやすい方が多くいると言う事で、皆様今夜も温度調節にお気をつけて。いつ熱帯夜がやってくるか分かりませんからね。熱いと思っただけで寝ていたり、冷房をガンガンかけていると、いつの間にか例年通りの春の涼しさが戻って来たりします。風邪をひきやすいですからね」

「浅草からお送りしております。東京スカイツリーのグランドオーブンが真近と言う事で、今夜このスカイツリーで試験点灯が行われます。あちら側の…見えますでしょうか、東京タワーとのメッセーシのやり取りにも注目です」

「今夜の天気はカラッとした春の晴天。時々熱帯夜」

「あ、つきましたつきました！！ ただいまスカイツリーが点灯しました。観光客のみなさんも今か今かと待ちわびていた様子です。あちらこちらで感嘆の声が上がっています。凄いですねー、薄い紫色のライトが美しいです。あ、東京タワーが祝福のメッセージを送っています。『おめでとうスカイツリー』って書かれていますか？ ですよね！！ スカイツリーはどのように返すでしょうか」

彼は都会のざわめきの中を、ただまっすぐに歩いていった。誰もスカイツリーの点灯に魅入って足を止める中、彼の迷いの無い闊歩は場違いの様に見える。

時代は待ってくれない。何もかもが新しく変わっていく。そしてそれがより“新しい”ものを生み出すステップアップとなっている。何もかもが変わっていくけれど、それはきつとグルグル回っているだけで、一向に前に進んでいる訳ではない。容量が無くなったら過去のテープを上書きしていくようなものだ。そしてそれを繰り返す程、テープはすり切れて画面は濁っていつていくだろう。いつかテープが壊れる日まで。

スカイツリーを目指し、誰もが流れに身を委ね歩いているのに、彼はスカイツリーを背にそれから遠ざかっている。誰もか上書きするテープを、彼だけは巻き戻している様に。

この町に熱帯夜がやってくる。それはこの世界では未来の事だが、

彼にとっては過去に等しい。

この国の、この世界の未来はまるで分からないけれど、この熱帯夜が引き起こす未来の危険因子を、彼は意識せずにはいられない。

「……………きたか…」

少年は目の前の黒い塊を睨んだ。誰にも見えていない、誰にもこれは見えない。みんなキラキラした未来だけを見ている。

ただ少年はこの黒い塊を無視できない。黒いもやのかかった塊は、まるで巨人の様に大きくて、ヒソヒソ何かを呟いている。

そしてそれは、熱を帯びている。

彼は高いビルの屋上に居た。新宿の都庁の上からは、奴がよく見える。すでにここは熱帯夜だ。

「止まれ熱帯巨兵^{ねったいきよへい}。お前の居場所はここじゃない」

“熱帯巨兵”と呼ばれたそれは、彼の声にゆっくりと振り向いた。まるで知能は無さそうな、物悲しい真つ黒な瞳をしているのに、少年の声には振り返ったのだ。奴は唸っている。

彼は都庁のてっぺんから、その巨人と向き合ったまま、一歩足を踏み出し飛び降りた。

飛び降り際に、その足先が宙に描いた異界の紋章を、破る様に落ちてゆく。

そして呟く言葉に、既に意味は無い。

「パラ・グローリア」

意味なき栄光の印が彼を包見込み、その静かな眼光と、出現した王の剣は、きつとあわれな巨人を捕えていた。重力に身を任せ落ちてゆく速度と共に、彼は剣で熱帯巨兵を引裂き、破裂させる。

熱い風が都会を吹き抜けて、一瞬でも皆は宙を仰ぐだろう。いきなり春の涼しさが戻って来て、目が点と言ったところだろうか。大都会の摩天楼が流れ星の様に上へ、上へと。栄光を追い求める様に。

彼は何事も無かった様に地上に降り立った。

静かなものだ、人はほとんど居ない。さっきの熱さはどこへ行ったのやら、カラツとした涼しさが、むしろ寒いくらい。

「おいてめえ、さっきのはどういう事だ。オレの獲物だったのに。あ？ てめー何もんだ」

「……………」

「ここ最近“あれ”を殺って回ってるのはてめーか？ オレはてつきりあの“女”かと思っていたが、お前も同じ剣を持っているのか？」

「……………」

「てめー、会話くらいまともに来ねえのかよ。コミュ障かっただイラツとくるぜ」

都庁のふもとで、彼と同じ様に剣を携えた赤毛の少年が、何やら物々しい言い草である。

少し離れた街頭の隣に、ショートカットの人物のシルエット。細い体のラインやスカート影から、少女であるとわかる。彼女もまた剣を持っていた。顔はよく見えないが彼と赤毛の少年の様子を伺っ

ているようだ。
彼は口を開く。

「……………あまりあれに関わるな、嫌な事を“思い出す”ぞ」

「は？」

「何も覚えていないようだが、このまま巨兵を倒し続けていたらいずれ何もかも思い出すことになる。“あっちの世界”の嫌な事全部」

「何言ってるんだ…てめえ」

「……………」

彼は赤毛の少年たちにきびすを返した。赤毛の少年はまだガミガミ文句を言っていたが、聞いているのか居ないのか、彼を足止めする事は出来なさそうだ。

「てめえ、無視するな！！」

「……………あかほし赤星君、もうよしましょう」

赤星と呼ばれた少年は、彼を追いかけてようとしたが、少し離れたところに居た例の少女に引き止められた。

「ウッセーつんだよ、俺はお前も敵だと思ってるんだからな真白。ましろ
あれは全部俺が倒す！！」

そう言っつて、赤星がもう一度彼の方を睨んだ時には、既に彼は居なくなっていた。探そうとすると少し向こうに見える華やかな町のネ

オンに目がくらみそうだ。

「チッ!!」

赤星は大きく舌打ちすると、真白を振り払い、剣を紋章の中に消すと、ズボンのポケットに手をつこんだまま機嫌悪そうに横断歩道を渡っていった。真白も彼の歩く様子を少しだけ見送ると、自分の剣を足下の紋章に沈め、少し寒いくらいの風に耳を澄ました。少し遠くから歓声にも似たざわめきが聞こえる気がする。何も見えない空を仰いだ。

きつと今、スカイツリーは東京タワーにメッセージを返した。

“ありがとう”と。

第1話：熱帯魚たち

> i 3 3 3 2 8 — 1 3 6 5 <

(イラスト/K氏)

桃瀬小乃葉ももせいののはにとって今日は忙しい朝だった。

昨日のスカイツリーの試験点灯を自分の家のマンションから覗いていたら、すっかり興奮してなかなか眠れなかったのだ。

興奮したら、彼女はピアノを弾きたくなる。しかしアパートであるため、電子ピアノにヘッドフォンをつけて、夜の間ずっと鍵盤を弾いていた。彼女は感情を音にするのが大好きだ。そうして作曲した曲は数多く、そちらの世界で彼女はいくつも賞をとる程、評価に値する旋律なのである。

小乃葉は鏡の前で長い髪を二つに結び、髪飾りをどうしようかずっと悩んでいる。

「ちょっと小乃葉！！ どうしたの早く朝ご飯食べちゃいなさい」

「分かってるけど…ちょっと待ってよ」

「全く、入学初日から遅刻したらお笑いぐさよ。それでなくてもあんたはどんくさいのに」

小乃葉の母は腰に手を当て、鏡の前からなかなか動かない小乃葉にため息をつく。小乃葉はいまだに髪の毛と髪飾りを照らし合わせて、眉をひそめたり首を捻ったり。結局ピンクのリボンに収まったようだ。

小乃葉は急いで朝食をかき込み、楽譜を持って家を出た。

彼女のお気に入りの曲がその楽譜には書かれている。立ち並ぶ背の高いマンションが、朝日の輝く方向から表面に光を受け、道を照らしてくれている。

清々しい空気がいつもと違ってより一層爽やかなのは、今日が待ちに待った入学式だからか、昨日の熱帯夜が空気の汚いものを持っていったからなのか、小乃葉はまだ分からない。

手に持つ楽譜だけが、それを知っている。

青星橋高校は都心の端にある私立高校だ。懐かしさを感じるレトロな雰囲気、広い敷地は沢山のケヤキの木に囲まれている。別棟校舎の側にあるガラス張りの温室は、この学校の一番見応えのある建築物である。確か校舎の改築時に、有名なデザイナーが手がけたのか。

「おはよー小乃葉」

「ともちゃん！！ 同じクラスだったねえ」

小乃葉は同じ中学校だった智佳と女子らしくキヤッキヤと喜び、声を甲高くする。

クラスは賑やかだった。知り合い、初めて知り合った者たち、他のクラスメイトなんかを伺いあったりして、それでも新しい環境に身を投じるワクワクにはかなわないと言う様に興奮気味で。

「お二人はどこから？」

「私たち…？ えっと、双葉第一から…」

「ああ、駅6つ向こうの？ 結構遠くから来てんだね」

「そうそう」

声をかけて来たベリーショートベリーショートの髪髪の女子が、隣同士の小乃葉小乃葉と智佳智佳の前の席の椅子に座った。

「あたし、この席だから。宇佐見美砂子宇佐見美砂子っていうの。ギャグみたいな名前っしょ」

「兎みたいで可愛いね…」

小乃葉は素直にそう思って、ポツと声に出す。

美砂子はゲラゲラ笑って、豪快に膝を叩いている。明るくて元氣の良い子だ。その笑い声に惹かれて、周りの女子がふらふらよって来たりして。最初からこんな風に友人が出来た試しの無い内向的な小乃葉だ。驚きと恥ずかしさと、嬉しさがかゆい。

「小乃葉ってモテるでしょ」

いきなり美佐子が女子トークを持ちかける。

「そ、そんな事無いよ」

「嘘だよ。小乃葉は中学の時人気あったもん」

智佳だ。

「ほらやっぱり。ねえ、女の子らしくて小柄で可愛いもん。良いなあ、その女子力を分けてくれよ」

美砂子の言葉に周りがドツと笑う。

「彼氏とかいたの？」

「い、居ないよ。…男の子ってなんか怖いし…」

「おわつ、超貴重。誰もがどいつでも良いからって付き合ったりしてる時代に。どういう人が好みなの？」

「優しい人…かなあ………美砂子ちゃんの方が、男の子とも沢山お話しできそう」

「男友達なら多いけどなあ。多分男だと思われてるんだな」

こういった彼氏彼女の事情チックな会話は、初めてならなお盛り上がる。隣のクラスに中学から付き合ってる彼氏がいるんだよとか、元カレが同じクラスにいたりとか、二組の何とか君がかっこいいとか、ただならぬ熱を帯びた会話だったりするものだ。隠していてもいつか噂でバレるならと、笑い話で語ろうとする物も多い。

「うちのクラス黒木さんがいるよ。入試トップの人。中学の全国模試でもいつも上位だったから、名前は知ってるんだ」

「あ、知ってる。うちのクラスだったんだ。結構美人だよな」

「そうなの？ 実物見た事は無いから」

小乃葉は知らないが、他の人たちの間で何となく分かる会話を、と

りあえず追って聞いていた。

「あ、ほら来た。黒木さんだ」

つかつかクラスに入ってきて来て（入口すぐの机だったらしくこちらまでやってはこないが）黒木さんという例の彼女は机に座る。するとさっそく隣の女子に声をかけられ、そちらと会話をしはじめた。黒髪を軽く内に巻いた、凜としていそうな美人な子だ。

「チツ、あつちの子たちにとられちゃったか。学年1位を仲間内に取り込めばテストのヤマとか当ててくれると思ったのに」

美砂子は小乃葉の机に肘をついて、やれやれと。

「ところで、学年で一番かっこいいって言われてる人知ってる？」

「七組の宮本君。ダントツで人気だったもんうちの中学で」

「えーでも三組の新垣君もかっこ良くない？ 草食系で細いけど」

「二年生に超かっこいい人いるんだって〜でも残念なイケメンらしいけど」

ここらへんの会話になったら、小乃葉にとってはどっちらけと言った感じだ。人気のある男子、かっこいいと言われる人、誰もがときめく人にそれほどの関心が無い。あーなるほどと思って、それまでなのである。だから異性と付き合いたいと思った事も、人を好きになった事も無い。初恋を知らないと思う。そう言ったときめきは、彼女の場合ピアノの曲の中にあるから。

今日の午後、音楽室のピアノを弾かせてもらう約束だ。それが楽しみで仕方が無かった。

こここの音楽室のピアノは小乃葉の祖父が寄与したもので、小乃葉に

とっては久々の対面となる。そのことしか、今は頭に無い。

そんな時、いきなりクラスがざわついた。

別の事を考えていた小乃葉も、この時ばかりはクラスの子たちと共に、その空気の変化に顔を上げたのだ。

クラスに入って来た黒髪の男子が、きつととても印象的だったから。本人は何て事無くクラスに入り、ただ席に着いただけの事なのに、周りの女子たちが息を潜め、そして緊張している。なんて不思議。

「ちょ、ちょ、ちょっと誰あの男子。めつつちゃかつこいいじゃん誰だよ宮本がダントツとか言つた奴、おい」

「せ、席的には紺野君。紺野悠夜………し、知らないわよあたし、あんな人」

「私も知らない。どこ中？」

一気にヒートアップした女子たちの会話。興奮しているのが良く分かる。

小乃葉でさえ、彼を見た時は一瞬ピアノの事を忘れてしまった。誰もが意識してしまうのは分かる。彼の“かつこいい”は他の人とは違う。そりゃあ、顔かたち、スタイルなんかの造形的な事は言うまでもないけれど、それ以上に空気が魅力的なんだろう。

まるで音楽の創る世界みたい、小乃葉は一瞬そう考えた。

紺野悠大の表情はあまり変わらない、少し怖そうとも思う。

クール系だと女子は騒いでいる。草食系なんてどうでもいいとかそんな事まで言っている。

他人に興味が無いはずの小乃葉が、何とか彼を見ずにはいられない。

男子たちに囲まれてしまった彼を、その隙間から目で追ってしまうのは、何でだろう。

そんな時、彼が一瞬だけ小乃葉を見た。

気のせいくらいのもものだけど、視線が合ったその瞬間が、なんだかとても大切な事のような気がした。

「わあ、本当におじいちゃんのピアノだ!!」

別の棟にある第二音楽室は、この学校の改築工事以来あまり使わなくなったらしい。小乃葉の祖父の寄与したピアノがそこにある。

小乃葉は放課後、このピアノを弾く事を学校側に許されていた。

マンションでは、いくら防音設備があつたとしてもなかなか開放的な気分でピアノを弾けない分、ここで存分に引ける事を嬉しく思うのだ。

埃っぽい空気が、誰もいないこの音楽室が、少しだけ黄色の昼下がりの光が、小乃葉の心を沸き立てる。

空気を感じたい。全ての。

彼女は窓を一つ二つ開け、新鮮で冷たい空気を吸うと、外にあまり人が居ないのを確かめる。やはりあまりに聞こえると恥ずかしいから。

「……………あれ…温室ってここ真下にあるんだ…」

たしか、有名なデザイナーが創つたつて言う温室。ドーム型で、天窓がぼつくり開いているのが分かる。有名とは言え、生徒はあまり関心が無いようだ。ほとんど人が居ない。

「今度行ってみようかな……」

小乃葉は窓から顔を出していたのを引っ込め、さあいざと、ピアノに向き合った。

今朝ちゃんと持って来た楽譜を、台に乗せる。

彼女が最初に作曲し、今でもずっと曲を練り続けている、お気に入り曲だ。絶対最初にこれを弾こうと思っていた。

決して賞には出さないで、自分だけで大切にしたいと思っている曲。今は無き祖父が、このピアノで弾くこの曲が大好きだった。

彼が曲に名を付けたくらいだ。

「熱帯魚たち」

彼女のピアノの音に、顔を上げた者はどれだけ居るだろう。心地よい音色と音階、どこか懐かしくなるメロディーに、この曲の聞こえる範囲に居た者はきつと感銘を受けただろう。

「……………」

ただ、数人にとってこの曲は、ただの曲であっただろうか？

心地よい感銘だけですまされなかった者が、この学校に何人かいただろうか？

例えばそれは、温室で一人本を読んでいた者や、マイナーな生物部の部室でカエルのホルマリン漬けを眺めていた者。

裏門から帰ろうとしてた赤毛の不良や、屋上でじっと外を眺めていた彼女だって。

その旋律に最も衝撃を受けたのは誰だっただろうか。

今まさに音楽室に向かっている彼だろうか。

小乃葉は今でも、なんでこの曲を作曲できたのか分からない。どこかで聞いた事のあるような音楽ではない。

勝手に頭に浮かんで来たのは、その曲を弾かずに居られないと思ったのは、きっと“あちら”で死ぬ程大好きだったからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7500x/>

真夜中のパラ・ダイス

2011年10月21日07時07分発行